

本と人との出会いがまちを 楽しくする



ながやま よしたか
永山 由高さん

略 歴

昭和58年東市来町(現・日置市)生まれ。日本政策投資銀行に勤務後、鹿児島へUターン。平成22年1月から天文館の喫茶店などで行う朝の読書会「TenDoku」を主宰している。今年7月に一般社団法人「鹿児島天文館総合研究所Ten-Lab」理事長に就任。

10月に天文館の商業施設のカフェの一角にできた「天文館図書館」。本を通して新たな交流を生み出し、まちを活気付けたいと考えて作った。その取り組みの原点には、ある本との出会いがあった。

CloseUp

クローズアップ

原点となった二冊の本

「子どものころから本が好きでした」と話す永山さん。本の世界のどきどき感に魅せられた。年齢を重ねてもいつも手元に本があり、仕事などで必要な情報を集めるのも本からだった。

大学卒業後、日本政策投資銀行へ入行したが3年半で退職。今後のことを考えていたとき、「リーダーシップの旅」(野田智義、金井壽宏著)という本に出会う。

リーダーはなろうと思つてなれるものではなく、満たされた日常生活や仕事から一步踏み出し、未知の世界を見る旅に出ることで、徐々にリーダーとしての資質が得られると書かれていた。この本を読んだ永山さんは未知の世界を見る「旅」に出ようと考へ、鹿児島へのUターンを決意した。

本を生かして学びの場が作れないか

鹿児島に戻った永山さんはNPO分野のコンサルティングの仕事 시작했다。仕事は充実していたが、徐々に不安とあせりに駆られた。

「銀行員時代に得た知識やノウハウだけで仕事をしている自分に気づいて、これではいけない、自分を高め

る学びの場を作ろうと考え始めました」

学びの場を作ろうと決意した永山さんは関東圏で1000人以上が参加する読書コミュニティ「読書朝食会」(Reading Lab) (リーディング・ラボ)の存在を知る。

自分の好きな本を90秒以内で紹介した後、5分間その本についてのフリートークをするという仕組みの面白さ、また本を通じて人生をより豊かにする仲間が集うというコンセプトに共感し、鹿児島でもやろうとさっそく試してみた。

「平成22年1月に行った1回目の参加者は僕と会社の先輩の2人だけ。鹿児島にはそういう学びの場は必要ないのかなと心が折れかかりましたね」そんなとき、Reading Labの発起人である加藤たけし氏が永山さんの活動を知って、会いたいと連絡してくれた。

加藤氏から鹿児島地に合ったものを作つてはどうかとアドバイスを受けた永山さんは周囲の人に意見を聞いた。そして鹿児島では学びの面より親しみやすい読書会を求めている人が多いことに気づいた。

まず会の名前を「天文館で朝読書」略して「TenDoku(テンドク)」と

変え、対象者もビジネスマンから主婦、学生にまで広げ、さまざまな価値観に触れたいという人も受け入れた。さらに本のジャンルも絵本や雑誌など多様な種類を受け入れたことにより参加者は徐々に増えていった。

「TenDokuはさまざまな人や本との出会いがある。そしてこの場のわくわく感は、人生を見つめなおすきっかけになります。今後は病院の患者向け読書会や、子どもを対象にしたキッズTenDokuが展開できないか考えています」

まちの人と一緒に「本棚」を作りたい

永山さんが今年から取り組んでいるのが「天文館図書館」だ。月2千円の運営費を支払うと、「ひとくち館長」になることができ、カフェの本棚に自分の好きな本が置ける。

「自分の好きな本をほかの人に紹介するという行為は、本好きにとつて大きな喜びです。また本棚には本の背表紙が持つメッセージを世に伝える役割もあります。本棚に並んだ本の背表紙を見ると『どんなジャンルの本が好きか』など、その人の人となりを表す場になる。このまちにどんな人が住んでいるのか、本棚を見ればそれが

わかる。天文館図書館は、「まちの人と一緒に作る本棚」なんです」

街の喫茶店に気軽に立ち寄り、読書をしながらいラックスした時が過ぎせる。天文館図書館はそんな居心地のいい場所になりたいと考えている。

「誰かのため、まちのためというよりも、自分の心地いい場所を作る。そうした場所が増え、点と点が線になり、面になればまちが楽しくなり人も集まっていける。それがまちの活性化にもつながると思います」

「未知の世界を見よう」と鹿児島に戻り、「自分自身を高めたい」と思つて始めたTenDokuの取り組みから2年。この取り組みから新たなまちづくりの可能性が生まれようとしている。



多くの人が参加するTenDoku